

国宝 観音猿鶴図のうち観音図(部分) 牧谿筆
中国・南宋時代 13世紀 京都・大徳寺 【後期展示】

国宝 孔雀明王像(部分)
中国・北宋時代 11~12世紀 京都・仁和寺 【前期展示】

ほとけたち

— 蒼海を越えた

特別展

SPECIAL EXHIBITION

仏画 SONG AND YUAN 宋元

B U D D H I S T P A I N T I N G

E A R L Y C H I N E S E M A S T E R P I E C E S I N J A P A N

SEP. 20 - NOV. 16, 2025

求めたのは、最高峰の祈りと美。

2025年9月20日[土] - 11月16日[日]

前期：9月20日[土]～10月19日[日] 後期：10月21日[火]～11月16日[日]

※会期中、一部の作品は上記以外にも展示替を行います。

京都国立博物館

KYOTO NATIONAL MUSEUM 平成知新館【東山七条】

【開催趣旨】

古くから仏教を信奉してきた日本は、仏教の先進国であった中国を慕い、規範や最新の情報を求めて海を渡りました。聖徳太子が派遣した遣隋使や、空海や最澄をはじめとした遣唐使の活躍によって、中国から日本に多くの仏教文物がもたらされたことはよく知られています。本展では、その後も日本に舶載されつづけた仏教文物のうち、宋・元時代の仏画を中心としてご紹介します。

数百年、古いものでは千年近く前に制作された宋元仏画には、当時の人々が救い手として信仰した仏たちの姿がとどめられています。宗教性と芸術性においてきわめて優れたこの絵画群は、東アジアの仏教絵画の“最高峰”と称えるにふさわしい水準をもっています。日本の仏教文化の中で重要な役割を果たし、今日まで大切に守り伝えられてきた結果、日本に現存する宋元仏画は、いまや量、質ともに世界で最も充実しているといえます。

本展は、日本に残る貴重な宋元仏画の全体像に迫る過去最大規模の展覧会です。2025年秋、その魅力とともに、日本文化の国際性や包容力、多様性をあらためて見直し、いまに伝えられた奇跡をひろく分かちあう機会にしたいと思います。

【本展の特色】

① “東アジアの最高峰”が集う、過去最大の「宋元仏画」展

宗教性と芸術性において極めて高い水準をもち、“東アジアの最高峰”ともいえる貴重な「宋元仏画」の数々を、過去最大規模でご紹介する展覧会です。

② 雪舟や長谷川等伯、俵屋宗達など日本の巨匠たちの名作も登場

「宋元仏画」と日本美術には、深いつながりがあります。牧谿^{もっけい}を筆頭とする禅宗絵画の澹瀾とした水墨表現は、日本の巨匠たちの創作に取り入れられ、多くの傑作に結実しました。

③ 京都会場のみの限定開催

本展の出品作の多くは京都の寺院に伝えられました。2025年秋、京都国立博物館だけの特別な機会をお見逃しなく。

ここが すごい！ 宋元 仏画



国宝 阿弥陀三尊像(部分) 普悦筆 京都・清浄華院

1 日本に伝来してきた「宋元仏画」は、それ自体の価値はもちろん、日本の仏教や寺院の歴史、美術の発展に深く関わるなど、文化的な影響力が極めて大きなものでした。そのため、海外の作品にもかかわらず多くが国宝や重要文化財に指定されています。出展総数150件以上、その約半数が国指定文化財です。

※出展総数、国指定文化財の件数は2025年2月時点のものです。今後、増減する可能性があります。

多くが**国宝・重要文化財**



国宝 観音猿鶴図のうち鶴図(部分) 牧谿筆 京都・大徳寺

2 宋・元時代にさかのぼる絵画作品自体、決して数が多いわけではありません。なかでも宗教画である仏画は、鑑賞や収集の対象にならなかったため、王朝の交代や信仰の変化などによって中国ではほとんどが失われてしまいました。その一方、日本には古くから伝わる宋・元時代の仏画が数多く残されており、世界に現存する宋元仏画のうち、大半は日本に残されていると推定されます。なかには制作地域、信仰背景などが判明するものや、中国の記録にも残らない画家の作例もあり、極めて貴重な絵画群だといえるでしょう。

まとまって残るのは**日本だけ**



重要文化財 五百羅漢図(羅漢供)(部分) 林庭珪・周季常筆 京都・大徳寺

3 絵画表現の水準の高さは宋元仏画の大きな魅力です。宮廷がリードして芸術文化が円熟期を迎えるなか、仏教聖地の中心で生み出された宋代仏画の壮麗さ、社会の大転換のなか少しずつ変容を遂げた元代仏画の多様性など、ひとつひとつが見どころの多いものばかりです。日本の絵師が手本として仰いできた、中国絵画の神髄に触れることができます。

中国絵画の神髄

— 中国の二つの王朝、宋と元 —

宋 (960~1279) は、唐が滅びた後の分裂期である五代十国時代を終わらせ、中国を再統一した国です。建国から北方の金に首都開封を陥落される靖康の変までを「北宋」、1127年の臨安（杭州）への遷都以降を「南宋」と呼びます。

宋は官吏登用制度である科擧を本格的に運用し、貴族に代わって知的エリートである士大夫階級が社会を支えました。そのため学問や文学、芸術などが洗練され、非常に高度な文化レベルに到達しました。

北宋時代は日本の平安時代中期から末期にあたり、東大寺僧の奝然らが経典や釈迦像など貴重な仏教文物を持ち帰ったのを皮切りに、宋を目指す僧侶たちが増えていきました。南宋時代は日本の鎌倉時代にあたり、より多くの日本僧が訪れるようになります。彼らは国際港の寧波から上陸し、寺院や仏教聖地をめぐりながら都の杭州を訪れています。禅や喫茶(抹茶)をはじめ、日本にとって重要な仏教文化が数多く南宋から伝えられました。

元 (1271~1368) はモンゴル人によって統治された国です。初代チンギス・カンによって建国されたモンゴル帝国は、ユーラシア広域を版図とする巨大帝国を築き、南宋や高麗、日本にも迫りました。第五代皇帝のクビライは中国へ進軍し、1271年に国号を「元(大元ウルス)」と改め、南宋を滅ぼして中国全土の統治を実現します。大都（北京）に都をおいた元の領土は宋をはるかにしのぎ、国際色豊かで、多様な人種から優れた人材を登用し、南宋などの旧体制をうまく利用して国家を整えました。

元時代は日本の鎌倉中期から南北朝時代にあたり、元寇などの混乱もありましたが、情勢が落ち着くと日本から訪れる僧が増えていきます。この時期は禅僧が中心となって往来し、多くの文物が日本にもたらされました。



第一章 宋元文化と日本

「宋元」とは、本来、宋と元という中国のふたつの王朝を意味しますが、日本では中世以来の特別な価値観をあらわす言葉でもあります。平安後期から鎌倉時代は、直接の交渉によって宋や元からたくさんの舶載品がもたらされますが、両朝が滅びた後の室町時代になっても、「唐物」が賞翫の対象として珍重されるなかで、「宋元」のものがとりわけ尊ばれました。その最たるものが、足利將軍家の唐物コレクション「東山御物」であり、格別な評価を受けながら今日まで受け継がれています。第一章では日本が高く価値づけ、憧れつつけてきた宋元文化の一端をご紹介します。宋元仏画への導入とします。



あし かが よし みつ 足利義満の愛した南宋山水畫の一級品

高士が樹下に腰をおろして遠く雲間を舞う鶴のすがたを眺める秋景(右)と、旅人が滝のそばに生える樹上の猿の気配を察して振りかえる冬景(左)。余白や人物の視線を効果的に用いる詩情に満ちた南宋山水畫の名品です。かつては北宋の徽宗皇帝の作と信じられ、珍重されてきました。それぞれの幅に足利義満の収蔵印である「天山」が捺されています。

国宝 秋景冬景山水圖 伝徽宗筆 中国・南宋時代 12世紀 京都・金地院 【前期展示】

column

「宋元仏画」を今に伝えた 立役者『君台観左右帳記』

足利將軍家の座敷飾りについて記した秘伝書『君台観左右帳記』。後世に多く写本が流布し、唐物鑑定に用いられました。ここには宋・元時代を中心とした中国畫人のランク付け一覧が記載されており、内容の多くは元時代に編まれた『図繪宝鑑』などの書物を参照していますが、当時日本に作品が舶載されていた普悦や陸信忠、張思恭など、中国の記録には無い仏畫師の名前も挙がっています。彼ら宋元時代の無名の仏畫師の作品は、『君台観左右帳記』に記載されたために日本でひろく知られ、多く伝えられたと考えられます。

ふわふわの毛並み

狩野派も学んだ南宋のいぬねこ画



重要文化財
蜀葵遊猫図・萱草遊狗図
伝毛益筆
中国・南宋時代 12~13世紀
奈良・大和文華館 【前期展示】

第二章 大陸への求法—教えをつなぐ祖師の姿

宋元仏画はなぜ日本に多く残されているのでしょうか。古くから仏教を信奉してきた日本は、**仏教先進国であった中国に規範や師法をもとめ、幾度も海を越えて大陸を目指しました。**入宋や入元を果たした日本僧たちは、聖地や有力な寺院をたずね、当地の僧侶に教えをうけながら最新の仏教を学びます。その成果に加えて、仏画をはじめ、仏像や經典、清規(生活規則)や寺院で用いられる資具(日用品)など、宋元両国から数多くの仏教文物を日本にもたらし、大切に伝えてきました。人の思いと行動が結んだ仏教文化の交流を、師資相承の証である中国の祖師たちの肖像(頂相)の紹介とともに説き起こします。

重要文化財

道宣律師像(右)・元照律師像(左)

中国・南宋時代 嘉定3年(1210)

俊苾律師像(中央)

鎌倉時代 嘉禄3年(1227) 京都・泉涌寺【後期展示】



南宋皇帝も認めた 仏教界の泰斗

南宋五山*の首座にあった径山万寿寺の住職をつとめ、理宗皇帝から「佛鑑禪師」の号を賜るなど、当時の仏教界を代表する僧侶であった無準師範。本作は日本から中国へ渡り、無準師範の弟子となった円爾が師資相承(師から弟子へ教えを伝えること)の証として持ち帰った頂相(肖像画)です。師を面前にするような写実性の高い表現は、宋代の肖像画としても極めて優れた作域を示しています。

*五山は禅院の等級(ランク)で、南宋政府によって定められた官寺制度。鎌倉五山や京都五山など、日本にも導入された。

国宝 無準師範像

中国・南宋時代 嘉熙2年(1238) 京都・東福寺【後期展示】

中国から日本へ、法脈をつたえる3人の祖師像

道宣(596~667)は南山律宗の祖とされる唐時代の僧侶、元照(1048~1116)は道宣の律学(南山律)を再興した北宋時代の僧侶です。1199年、南宋に渡った日本僧の俊苾(1166~1227)は、12年にわたる研鑽を経て、帰国の前年にこの律宗の二祖師の画像を贈られました。俊苾の肖像は、俊苾が亡くなる少し前に、渡来していた中国画家の周坦之に描かせたものといえます。中国から持ち帰った道宣・元照像とかけ並べることを意識したためか、ほぼ同じ大ききで制作されています。



column

いち早く宋に至った日本僧 奮然の偉大なる功績

宋(北宋)が建国され、国内の整備を進められるなか、入宋を果たした日本僧が奮然(938~1016)でした。東大寺僧として活躍した奮然は、仏教聖地の巡礼を志し、983年8月、朝廷の許可を得て商船に乗り、宋に至ります。都の開封では宋の第二代皇帝・太宗に拝謁を許され、国家事業として完成したばかりの版木から刷った、摺本一切経一セット(5048巻)を下賜されるなど、国使のような厚待遇で迎えられました。三年ほどの滞在で念願であった聖地巡礼を果たした奮然は、986年、帰国の途につきます。奮然が北宋から日本にもたらした仏教文物は、先の摺本一切経のほか、仏舎利を収めた七宝合成塔、白檀製の釈迦像など極めて貴重なものばかりでした。唯一現存する釈迦像は、生前の釈迦の姿を写したとして信仰されていた像を模して、奮然が中国の職人に依頼して造らせたもので、京都・清凉寺に伝わっています。

比類なき宋代仏画の最高傑作

第三章 宋代仏画の諸相——宮廷と地域社会

唐が滅んだ後、五代十国と呼ばれる分裂の時代を経て、960年にふたたび中国を統一したのが宋という国です。宋は、建国から靖康の変（1127年）までを北宋、都を江南に移してからを南宋と呼びます。科挙を本格的に運用した宋では、士大夫（科挙に合格した官僚）が社会をリードして知性的な文化が醸成され、宮廷を中心に絵画表現も高度な水準に達し、その反映を仏画にもみることができず。また、南宋の宮廷が置かれた臨安（浙江省杭州市）は仏教の伝統が色濃い地域で、近隣には天台山、阿育王山、普陀山といった仏教聖地があり、海域交流の窓口であった明州（寧波）をはじめ、市井で多くの仏画が制作されていました。日本に残る仏画がいかに生まれてきたのか、宋代の文脈に照らしてみています。



国宝 孔雀明王像

中国・北宋時代 12～13世紀 京都・仁和寺
【前期展示】

孔雀明王は密教で信仰される尊格です。日本では一面四臂の姿が一般に知られていますが、北宋後期に制作されたとみられる本像は、三面六臂の姿をしています。この姿は経典などに明確な典拠が見つからず、現在も本作の制作背景について、盛んな議論が進められています。謎の多い画像ですが、孔雀明王の慈悲と威厳に満ちた姿、壮麗な孔雀、空間をうめる幻想的な雲など、表現力は他を圧倒し、宋代絵画の到達点がいかに高度であったかを今に伝えています。

【部分】



心の中に現れる、光に満ちた仏の姿



中央が阿弥陀如来、向かって右が観音菩薩、左が勢至菩薩です。控えめな輪郭線や淡彩によるぼかし、三尊を大きく包み込む舟形の光背などは、明確な形を強調せず、ぼんやりと浮かびあがる印象です。通例の阿弥陀三尊像は、極楽浄土で往生者をむかえる姿や、臨終の時に来迎する姿で表されることが多いのですが、この三尊の表現はほかに比べると特異なものです。これについて、仏も浄土も心の中にあるという、中国浄土教の唯心浄土（弥陀）信仰とのかかわりが指摘されています。心の中にみた阿弥陀の姿を優美に描き出す、南宋仏画の白眉です。

国宝 阿弥陀三尊像 普悦筆
中国・南宋時代 12～13世紀
京都・清浄華院 【後期展示】

勸進五百羅漢 【後期展示】

羅漢供 【前期展示】

当時の人々 記録される 羅漢とともに

1幅につき5人の羅漢をあらわし、全100幅構成で制作された南宋時代の「五百羅漢図」。このうち94幅が現存しています。林庭珪と周季常という二人の画家が中心となって制作にあたり、約10年をかけて完成しました。寧波（浙江省）郊外の東銭湖の湖畔にあった恵安院に施入され、義紹という僧侶が勸進し、地元の有力者の協力を得て成し遂げた大事業であったことなどがわかっています。画幅のなかには羅漢だけでなく、仏事に参加する当時の人々も描きこまれています。

重要文化財 五百羅漢図 林庭珪・周季常筆
中国・南宋時代 淳熙5～15年(1178～88)
京都・大徳寺 【通期展示(前後期で各4幅ずつ展示)】



第四章 牧谿と禅林絵画

南宋末から元初に活躍した禅僧の牧谿は、日本で最も愛された中国画家と言って差しつかえないでしょう。臨済宗の傑僧である無準師範（1177～1249）の弟子であったことも、日本に受け入れられた大きな要因でした。牧谿の絵画は水墨を主体とし、簡潔でやや粗放な筆致と淡墨の効果を最大限に發揮した、当時の中国の禅林水墨をよく伝えるものでした。宋元時代は士大夫や文人の支持もあり、禅宗の絵画が大いに發達しました。墨を面的につかう「破墨」や「潑墨」、きわめて淡薄の墨で形象の不明確なものをあらわす「罔両画」、宮廷画家梁楷がはじめたという筆画を減らした「減筆体」、着色を排した線描主体の「白描」など、宋元の禅林が指向した水墨表現はじつに重層的でした。ここでは牧谿の代表作「観音猿鶴図」を基点としながら、宋元の禅宗絵画の豊かな様相をたどります。



猿鶴の
みちびく、
深淵なる
禅の悟り
が

国宝 観音猿鶴図 牧谿筆 中国・南宋時代 13世紀 京都・大徳寺 【後期展示】

本作は牧谿の中でも随一の名品として知られています。岩上に坐禅する白衣観音を中幅に、古木に憩うテナガザルと、竹林から歩み出て鳴く鶴を左右幅に描いています。白衣観音は悟りを求める修行者の姿を象徴し、猿鶴の鳴き声は「猿啼」や「鶴唳」と呼ばれ、隠棲生活の静寂を連想させるものです。水墨を効果的に用い、観音が冥想する清浄な空間を見事に表現しています。

column

日本でもっとも愛された中国画家・牧谿

牧谿は、南宋時代の13世紀後半に活躍した禅僧画家で、法諱の名でもよく知られています。画家としての牧谿は、当時の中国でも一定の評価があったようですが、酷評する言説もあり次第に忘れ去られてしまいました。一方、日本における牧谿の評価は極めて高く、現在においても絵画史に燦然とその名を刻んでいます。牧谿の絵画は禅宗寺院の中で尊ばれただけでなく、大名や茶人たちにも愛されました。“和尚の絵”といえば牧谿のことを指すなど、その浸透ぶりは他の中国画家には無いものです。また、日本の画家に手本として学ばれ、「和尚様」という画風（スタイル）ができるなど、日本文化に深く受け入れられました。

淡墨とわずかな筆致であらわす虚実の境

布袋図 伝牧谿筆

中国・南宋時代 13世紀
京都国立博物館 【前期展示】



【部分】

第五章 高麗仏画と宋元時代

918年、朝鮮半島に高麗(918~1392)が建国されると、仏教をあつく信奉する国へと発展します。高麗の長い歴史は、中国に宋と元が興亡した時期と重なり、両国との交流は高麗における仏画の制作とも無関係ではありませんでした。国境を接した遼や金との冊封体制(君臣関係)に苦心した高麗は、国を維持すべく大国の宋へ接近します。宋は高麗を厚遇し、多くの文物を下賜しました。宋が弱体化し、モンゴル軍の勢力が高麗に侵攻すると、高麗は朝廷を江華島に移し抗戦します。この時、モンゴル軍の撤退を祈願して、羅漢図の制作や八万大蔵経再彫などの大規模な仏事を行なっています。現存する高麗仏画は、高麗が元に帰順した後の13世紀末以降のものがほとんどですが、国の情勢が不安定だからこそ、切実な想いで仏教信仰が行われたのでしょう。



弥勒は釈迦の入滅後、56億7千万年先の未来に兜率天から現世に降りてきて人々を救済するとされています。本図はまさにその場面で、弥勒が現世に下生し、龍華樹の下で成道して仏(如来)となり、人々に説法する様子を描いています。縦2メートルを超える大画面に弥勒と脇侍は肉身を金であらわされ、諸尊も細部に至るまで美しく彩られています。落款から王室の画家によって制作されたことがわかる高麗仏画の基準作です。

重要文化財
弥勒下生变相図 李晟筆
朝鮮半島・高麗時代
至元31年/忠烈王20年(1294)
京都・妙満寺 【前期展示】

遠い未来の救世主、
弥勒降臨の劇的場面
(修理後初公開)



モンゴル軍撤退を願って
作られた500幅の羅漢図

五百羅漢像(第234尊者)
朝鮮半島・高麗時代 高宗22年(1235) 奈良・大和文華館 【前期展示】

第六章 仏画の周縁―道教・マニ教とのあわい

中国において、**仏教と同様に長い歴史をもち、広く信仰を集めてきたのが道教**です。道教は、不老長生の希求と老荘思想を基盤とし、儒教や仏教の倫理や儀礼と融合しながら発展しました。美術においては仏像や仏画を参照しながら、天尊や道教神像、仙人像などを生み出していきました。この一方で、**仏教美術の側に道教的要素を含んだものが現れる例もあります**。さらに、布教のために**仏教図像を借用した宗教は道教だけでなく、中国の江南地方にわずかにコミュニティをもったマニ教にも認められます**。マニ教絵画を知らない人には仏画にしか見えず、これが幸いして現在に伝えられたといえます。



古代オリエントで 生まれた宗教、 姿を変えて 中国に息づく

マニ教は3世紀にササン朝ペルシア領内で成立した宗教です。中国には唐時代の7世紀末に伝教師が訪れますが、受け入れられず間もなく禁教となりました。中国国内での勢力は拡大しなかったものの、14世紀ごろまで江南地域で存続していました。本図は個人の魂の死後の運命をきめる裁判の場面と、その行き先である三つの世界(天国、現世、地獄)が表されています。三尊のようにあらわされる中央の人物がマニの姿です。画面の構成やモチーフは明らかに当時の中国の仏画(十王図や六道図)を参照しています。

らくどうず
六道図(個人の終末論)
中国・元時代 14世紀
奈良・大和文華館 【後期展示】



日本のお寺に なぜ仙人?

右の魂を吹き出す仙人が李鉄拐、左の白い蝦蟇をのせた仙人が劉海蟾と言われています。この二人は、全真教という道教の一派が祖師にかかげた有名な仙人で、元時代には多く描かれるようになりました。のちにはこの蝦蟇鉄拐と禅の祖師である寒山拾得を合わせて「四仙」とする画像が登場するなど、全真教と禅宗の接近がうかがえます。中世以来、日本の寺院に多くの仙人画像が伝入した背景には、こうした中国側の事情も反映していると見られます。

重要文化財 蝦蟇鉄拐図 顔輝筆
中国・元時代 13~14世紀
京都・百遍遍知恩寺 【前期展示】

第七章 日本美術と宋元仏画

「宋元仏画」は、礼拝対象である本尊画像として、儀礼空間の荘厳として、あるいは禅の精神性を伝える掛物として様々に機能しました。中国から請来されたこれらの仏画は、規範的な図像となり、日本で多くの複製（コピー）が作られて広まりました。日本の画家にとって中国で制作された絵画は貴重な手本でした。なかでも、禅林水墨や道釈人物画は、礼拝画像に比べて筆墨やモチーフの表現に自由度が高かったため、画家の研鑽を支えるだけでなく、新たな創作の糧となりました。梁楷や牧谿、顔輝など一部の画家の表現は、一種のスタイル（筆様）に整理されて広く模倣されるまでになりました。ここでは宋元仏画が日本美術の成熟にとつていかに重要であり、長く抛りどころとなってきたのかを、中世・近世絵画の巨匠に受け継がれる面影をたどりながら見渡し、本展の締めくくりとします。

巨匠・等伯、南宋の画家・牧谿に憧れて



重要文化財 枯木猿猴図 長谷川等伯筆
桃山時代 16世紀 京都・龍泉庵 【後期展示】



国宝 蓮池水禽図
依屋宗達筆
江戸時代 17世紀
京都国立博物館
【10/21~11/2展示】

牧谿の本質をとらえ、
宗達の水墨画ここに極む

いまや押しも押されぬ日本美術史上の巨匠、長谷川等伯。国宝「松林図屏風」の精妙な水墨表現に心を打たれた人も多いはず。等伯の優れた水墨画は、南宋の画家である牧谿の表現を学んだ成果といえます。牧谿「観音猿鶴図」の猿幅と本図を比べてみると、粗放な筆づかいや墨の濃淡の微妙な変化など、牧谿の作品からうまく取り入れていることがわかります。ただし、牧谿の静謐な雰囲気とは異なり、躍動感あふれる傑作に創り変えたのは、さすが等伯の力量といえます。

奇想の画家の手にかかれば、ここまで斬新



重要文化財 群仙図屏風 曾我蕭白筆
江戸時代 明和元年(1764) 文化庁 【前期展示】

宋末元初の画家である顔輝の描いた道釈画（道教や仏教の人物を描いた絵）が日本画壇に及ぼした影響は大きく、顔輝風のアクの強い人物表現によって多くの画家が個性的な作品を残しています。なかでも曾我蕭白のこの群仙図屏風の突き抜けた描写は衝撃的であり、モチーフとして顔輝由来の仙人像を散りばめながら、蕭白独自の強烈な個性で濃密な画面にまとめ上げています。

【トピック展示I】

中国受容と仏像

仏の生身性をあらわす表現や、宋代仏画に基づいて制作されたという“逆手の阿弥陀”など、仏像における中国受容について、中国と日本の優品を比較しながらご紹介します。



かんのおんぼくさつざう
観音菩薩坐像
中国・南宋時代 13世紀
京都・仁和寺 【通期展示】

【トピック展示II】

経絵の世界

仏の言葉そのものである経典は、仏教文物のなかでとくに重視されました。ここでは経典の冒頭にあらわされた経絵を手掛かりに、宋元時期の東アジアの仏教文化のつながりを見渡します。



国宝 こんしきんじだいほうしゆくきょう
国宝 紺紙金字大宝積経 卷第三十二
(高麗国金字大蔵経) (部分)

朝鮮半島・高麗時代 統和24年(1006) 京都国立博物館 【前期展示】

【開催概要】

展覧会名：特別展「宋元仏画—蒼海を越えたほとけたち」

会 期：2025年9月20日[土]～11月16日[日]

前期：9月20日[土]～10月19日[日]

後期：10月21日[火]～11月16日[日]

※会期中、一部の作品は上記以外にも展示替を行います

会 場：京都国立博物館 平成知新館

開館時間：午前9時～午後5時30分(金曜日は午後8時まで開館) *入館は各閉館の30分前まで

休 館 日：月曜日(ただし祝日の場合は開館し、翌火曜日休館)

主 催：京都国立博物館、毎日新聞社、京都新聞

協 賛：DNP大日本印刷

● 一般お問合せ：075-525-2473 (テレホンサービス)

● 展覧会公式サイト：https://sougenbutsuga.com

● 展覧会公式X・Instagram：@sougenbutsuga

*会期等は諸事情により変更する場合があります。

観覧料等の情報は決まり次第、展覧会公式サイト等でお知らせします。



【アクセス】

◎JR・近鉄=京都駅下車、駅前市バスD2のりばから206・208号系統にて博物館三十三間堂前下車、徒歩すぐ

◎京阪電車=七条駅下車、東へ徒歩7分

◎市バス=博物館三十三間堂前下車、徒歩すぐ

*ご来館はなるべく公共交通機関をご利用ください。駐車場は有料となっております。

京都国立博物館

KYOTO NATIONAL MUSEUM 平成知新館【東山七条】

〒605-0931 京都市東山区茶屋町527 <https://www.kyohaku.go.jp/>

報道に関するお問い合わせ=特別展「宋元仏画」広報事務局(共同PR内)担当：三井

TEL. 03-6264-2382 / E-mail: sougenbutsuga-pr@kyodo-pr.co.jp